

## はじめに

生涯発達心理学は、文字どおり生涯にわたる発達を見通しながら人の一生を探究する学問である。

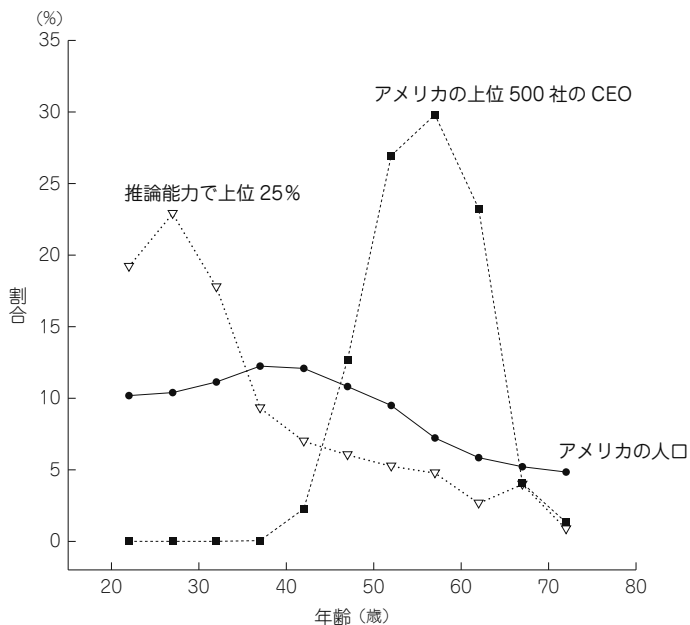
筆者（鈴木）が学生の頃、発達心理学といえば子どもの発達が主たるテーマであった。広くとって人生の前半、赤ちゃんから子ども、そして大人になるまでの発達が主たる研究対象だった。あえていえば、まだ大人として完成していない時期に、どのような経過を経て大人という完成態になるのかを探究するという前提があったように思う。少なくとも学ぶ側にはそう感じられた。

さらにいうと、大人になってからの変化といえば、高齢期に向かっただけの、さまざまな意味での衰え——機能低下や喪失が焦点になった。人生後半については、いろいろなことがどれだけ「できなくなるか」「失うか」という意味で、ネガティブなものとして捉えられていたと思う。

しかしこのテキストを手に入れている読者は、大学に入学し、すでに大人の仲間入りをしているとして、自分の発達は完成しつつあると思うだろうか。背が伸びることはもうないかもしれないが、これから先、変わっていく余地は大いにあり、未来の自分は容易に想像できないのではないか。小学生から中学生、高校生へと発達してきたように、これから大学で学び社会に出て、「一人前」になっていく過程で、やはり発達するのではないか。そして身近にいる大人を思い浮かべてみよう。40歳代や50歳代の人たちは、もう発達が止まったと見えるだろうか。

生涯発達心理学は、大人になって以降も発達は続くと仮定したうえで、その発達とはどのようなものを探究する学問である。大人

図 20～70 歳代の各世代が占める割合



(出所) Salthouse, 2012 を一部改変。

になって以降，人生後半に「発達」という観点からポジティブな意味を見出そうとするとしてもよい。言い換えれば，生涯全体を見通して発達を考えることにより，発達ということの意味そのものを捉えなおそうとするのである。

最近のアメリカのデータから具体例を示そう。グラフは，3つの指標について 20 歳代から 70 歳代までの各世代が何 % の割合を占めるかをグラフにしたものである (Salthouse, 2012)。

図中の●の実線はアメリカの人口である。どの年代も人口の 5% から 10% までを占めており，カーブは緩やかである。▽の点線は，

知能検査（WAIS-IV）の推論能力で上位 25% がどの年齢に多いかを示したものである。見てわかるように、20 歳代から 30 歳代が突出して多い。本文で詳しく解説するが、推論能力は加齢にともなう低下が比較的大きなものであり、それが反映されている。

■の破線はアメリカのフォーチュン誌が選んだ 2009 年の全米上位 500 社の CEO（最高経営責任者）がどの年代に多いかを示している。知能とは対照的に、50 歳代から 60 歳代が飛びぬけて多い。CEO とは、その企業の命運を左右する重要事項の交渉や決定を行わない、結果に責任を負う役職である。膨大な関連知識を踏まえ将来を見越して会社の舵取りをするわけで、中年期以降の人に多いからといって、年功序列で生き残った人が就くわけではない。むしろ生き馬の目を抜くような競争に勝ち残った人が任される役職で、知能検査で測られる能力とは別の知性が求められるだろう。このグラフは、そのような知性が実際にビジネス社会で生きてはたらいっていることを示している。

推論能力は個人内の特性であるのに対して、CEO はいわば社会的な役割である。大きくいえば、「社会のなかの個人」を評価する指標である。生涯発達心理学は、単純に個人内の変化を扱うというだけでなく、社会（環境）のなかの個人を問題にするという側面も強い。

生涯にわたる発達とは、要するに人の一生ということだから、多くの場合が長い年月にわたる。その間に社会は大きく変化する。大人になり人生後半を迎えれば、自分の子どもや後継者を育て、自分が培ったものを手渡すことになるが、若い世代が生きる未来は、それまでとは異なる社会、環境になることが確実であろう。人の一生という長い時間経過を問題にすることは、発達を絶えざる環境変化のなかで考えることを要求するのである。

近代から現代にかけてはことに環境の変化が著しい。最近ではSNSの普及がよく話題になる。通信手段の発達でいえば、筆者が子どもの頃には自宅にまだ電話がない家が多かった。小学生のときのクラス名簿（個人情報への配慮から、いまでは配布されなくなった）に「連絡先」の欄があり、多くの家では近所の人々の氏名が書かれて「呼出」とあった。他人の家にあがらないと電話をかけられなかったわけで、家族の外と手軽に連絡を取りあうことは難しかった。さらに昭和以前にさかのぼれば、一般社会に電話がほとんど存在しなかった。知りあいの家に用事があればその家を訪ねていくことになる。当然留守のことがある。明治期の作家の日記によれば、友人を訪ねても不在で、家にあがってしばらく待っていたが結局会えずに帰ってきた、という記述が多いという。そういう社会に暮らしていると、他者との関係のとり方や考え方がいまとは少し違っていただろうと想像される。

たとえば何か交渉事があって友人の家を訪ねたとしよう。相手が不在でしかたなく長く待っている間に、相手の状況に思いをめぐらし、自分の当初の考えを変えることもあつただろう。他者とすぐにコミュニケーションがとれることは、相手の立場に立つ暇もなくすぐに交渉に入ることになり、便利な反面、衝突も多くなつただろう。

個人がどのように発達するかは、その個人がどのような環境で生まれて成長し、大人になり、歳をとっていくかということに左右される。「発達は環境に埋め込まれている」ということを発達研究の基本的前提にしようというのが、生涯発達心理学の中心的な前提である。

本書は、第Ⅰ部の3つの章で生涯発達心理学の理論的背景（第1章）と認知発達の基盤（第2,3章）について概観し、第Ⅱ部では他

者との関係性と自己の発達にも焦点をあて、大まかに人生前半と人生後半に分けて解説をする。他者との関係性は第4章と第7章、自己の発達は第5章と第8章、認知能力は乳幼児期を解説した第2,3章を受けて、小学生から高齢期までを第6章で扱い、第9章で、全体をまとめる意味で人としての成熟と英知を解説する。

社会のなかで他者と関わりながら、人がどう発達するのか。子どもときだけでなく、大人になって以降も含めた生涯にわたる発達について、読者がイメージを作る手助けに本書がなることを願う。

2016年8月

著者を代表して

**鈴木 忠**

## 著者紹介

鈴木 忠 (すずき ただし)

執筆担当 はじめに, 第1 (共著), 2, 3, 4 (共著), 6, 7 (共著), 9 章

現職 白百合女子大学人間総合学部教授

主著 『生涯発達ダイナミクス——知の多様性 生きかたの可塑性』  
(東京大学出版会, 2008 年)

『生涯発達とライフサイクル』(共著, 東京大学出版会, 2014 年)

飯牟礼悦子 (いむれ えつこ)

執筆担当 第1 (共著), 5, 8 章

現職 大東文化大学文学部講師

主著 「保育者効力感の変化に関する影響要因の縦断的検討——保育専攻学生における自信経験・自信喪失経験に着目して」(共著,  
『保育学研究』49, 212-223, 2011 年)

『PTG 心的外傷後成長——トラウマを超えて』(分担執筆, 金子書房, 2012 年)

『昔話から学ぶ人間の成長と発達——グリム童話からディズニー作品まで』(分担執筆, ナカニシヤ出版, 2015 年)

滝口のぞみ (たきぐち のぞみ)

執筆担当 第4 (共著), 7 (共著) 章

現職 帝京平成大学大学院臨床心理学研究科准教授

主著 『こどものこころのアセスメント——乳幼児から思春期の精神分析アプローチ』(共訳, 岩崎学術出版社, 2007 年)

『アスペルガーと愛——AS のパートナーと幸せに生きていくために』(共訳, 東京書籍, 2015 年)

『夫がアスペルガーと思ったとき妻が読む本——誰にもわかってもらえない“カサンドラ症候群”から抜け出す方法』(共著, 河出書房新社, 2016 年)

第 I 部  
発達を支えるもの

第 1 章

発達の可塑性

3

生涯発達心理学とは

- 1 発達の可塑性 ..... 3  
発達には環境に反応して進む (3) F と G: 養育放棄をされて育ったきょうだい (4) オランウータンのオスの発達の差異 (6)
- 2 心理学の発達モデル ..... 8  
●発達段階  
発達のメカニズム 1: ピアジェ (8) 発達のメカニズム 2: エリクソン (9)
- 3 社会文化的環境による多様性 ..... 12  
時代による発達のしかたの変化 (12) 文化や社会による発達の多様性 (12)
- 4 横断的方法と縦断的方法 ..... 14  
●コホートの概念  
年齢集団の特徴を捉える (16)
- 5 生涯にわたる発達 ..... 17  
生涯発達を規定する要因 (17) 獲得/喪失のダイナミクス (20)

## 胎児と0歳児

- 1 胎児期と新生児期 ..... 23  
 妊娠(23) 胎芽期: ヒトらしくなる前(25) 胎児期: 胎児は自分から動いている(25)
- 2 新生児期 ..... 27  
 ●胎児期との連続性  
 原始反射とその消失(27) 脳神経系の発達(28) 胎児は記憶を始める(31)
- 3 学習の原理の確立1 ..... 31  
 ●循環反応と生得的制約  
 生得的制約: 学習をスムーズにする方向づけ(32)
- 4 学習の原理の確立2 ..... 35  
 ●他者を介しての学習  
 他者の意図への気づき(36)

## 表象の獲得

- 1 幼児期の表象 ..... 41  
 見立てて遊ぶ(41) モノと現実を結びつける(42) ことばの発達(44)
- 2 自己中心性 ..... 45  
 ●幼児の思考の限界  
 視点を換えることの難しさ(45) 見かけと本当の区別(46) 見かけで数える(48) ほかの場所からはどう見えるか(49) 心という概念を知る(51)
- 3 脱中心化の芽生え ..... 52  
 家庭内でのやりとりからの学び(53) 「心の理論」再考(55) 大人の視点に立つ(56)



## 第Ⅱ部

# 生涯にわたる発達

### 第4章

## 他者との関係性のはじまり

61

### 基礎と展開

- 1 他者認識のはじまり ..... 61  
赤ちゃんは目を見たがる (62) 他者をまねる (62) 赤ちゃんのほほえみ (63) 8カ月不安 (64) 親しい他者を頼る (65)
- 2 人との情緒的結びつきのはじまり ..... 65  
愛着とは (66) 愛着は行動を支える (67) 愛着の個人差 (68) 愛着の可塑性 (71) 愛着は母親以外とも成り立つ (72) 愛着タイプは文化を反映する (73)
- 3 遊びを通じた関係性の発達 ..... 74  
遊びという関わり (74) 遊びの発達 (75) 遊びから仲間集団へ (77)

### 第5章

## 子どもの自己発達

79

### 自己のはじまりと表現

- 1 自己の芽生え ..... 79  
自分に気づく (79) 自分を知る (81) 自分ではたらきかける (82) 自己を特徴づける：気質 (85)
- 2 自己を表現する ..... 87  
自己を統制し、表現する (88) 他者と比較して自己を理解する (93)
- 3 自己を見つける ..... 97  
自己を特徴づけるもの：パーソナリティ (98) 自覚的に選び取る自己：アイデンティティ (100)

- 1 学校での学習と発達 ..... 109
- 具体的操作期・形式的操作期
  - 具体的操作期 (109) ことばの発達: 「一次のことば」から「二次のことば」へ (110) 学校での学習と発達: 方略の獲得 (112) メタ認知 (113) 形式的操作の発達 (115)
- 2 認知能力の生涯発達と可塑性 ..... 118
- 成人後も知能は変化するのか (118) 加齢により記憶能力は衰えるのか (120) 高齢者の知的訓練 (123) 限界テスト (125)
- 3 熟達化と実践的知能 ..... 126
- 加齢のハンディを克服する (126) 上手に歳をとる (129) SOCの発達差 (130) 実践的知能 (132)

## 人間関係の広がりと深まり

- 1 友人・仲間関係の発達 ..... 137
- 子どもの所属集団と社会化 (138) 友人関係の発達 (139) 「グループ」 (141) 友人とのつきあい方 (143) 青年期の友人関係の機能 (144)
- 2 タテからヨコへの関係性の構築 ..... 145
- 青年期の精神的自立 (145) 親の関わりの変化と発達 (146) 穏やかな青年期 (147)
- 3 親密な関係性の発達 ..... 147
- 親密な関係への関心 (147) 恋愛対象への愛着 (148) パートナーシップの確立 (149)
- 4 発達的に見た結婚 ..... 150
- 結婚に対する意識 (150) パートナーに対する愛着 (153) 結婚生活の持続と破綻 (154)

- 5 親になることによる発達 ..... 159  
 親になること (159) 父親の育児参加 (160) 子育てをめぐる夫婦間のケア (160) 育児ストレスと社会的サポート (161)
- 6 高齢期の夫婦関係と社会的ネットワーク ..... 162  
 社会的ネットワークの変化 (162) 高齢者へのサポートとウェルビーイング (163)

## 第8章

## 大人の自己発達

167

### 自己を未来へつなぐ

- 1 多重化する自己 ..... 167  
 生き方の多様性を見る (167) 複数の役割が影響しあう (171)
- 2 自己の揺らぎと成長 ..... 172  
 揺れる自己：「中年期危機」は何をもたらすのか (173) 自己を見つめ、紡ぎなおす (176)
- 3 自己をつなぐ ..... 179  
 ジェネラティヴィティとは (179) 自己を次世代へつなぐ (180)
- 4 自己を統合する ..... 183  
 老いと向きあう自己 (184) 統合し、つないでいく自己 (186)

## 第9章

## 成熟と英知

193

### 人生を上手に生きること

- 1 人はいかに成熟するのか ..... 194  
 自他の感情と向きあう (194) 社会や人間関係のなかでの身の処し方 (195)
- 2 英知 ..... 197  
 英知とは何か (197) 英知の測定：英知に関係した知識 (198) 英知の発達 (200) 英知はいかに発揮されるのか (201) 人を愚かさから救うもの (204)

引用・参考文献 207

事項索引 219

人名索引 224

イラスト 有留ハルカ

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

# 1 人はいかに成熟するのか

---

## 自他の感情と向きあう

天真爛漫な人を子どものように率直で素直だというのが、本当に子どものように感情を表に出す大人はあまりいない。人間関係のなかでもまれながらも精神的健康を保って生きていくうえで、感情をコントロールすることは、大人としての成熟の重要な側面であり、心理的なウエルビーイング（第7章参照）につながっている。ラブヴィ・ヴィーフは、感情制御の原理には一般的に2つの軸があるとする理論を提案している（Labouvie-Vief et al., 1989; Labouvie-Vief & Medler, 2002）。

ひとつは自分自身の快を追求する軸である。いつもできるだけ満足感もちハッピーな気分でいたい、という傾向は、健康な人なら誰もがもっている。自分の心の安定（快）に結びつかないことに深く関わらないようにする傾向がある（快に向けての感情の最適化）。たとえばテレビで事故や災害のニュースを見て、そのたびに心の底から共感して涙を流すことを私たちはしない。もしもそうしていたら相当に不安定な感情状態になってしまう。

一方、いろいろな感情を知り、自分のなかにさまざまな感情を見出そうとする傾向もある（感情の分節化）。自分が経験していない他者の感情を類推し推し量ることで自分の感情生活を豊かにしようとする傾向である。

あるテレビ番組で次のようなシーンがあった。数万桁に及ぶある数字を暗唱する年配の男性が世界記録に挑戦すべく、判定員や記録員とともに出演した。男性の妻が手作りのおにぎりをもってきたり、緊張で間違えてしまう彼の背中を撫でて励ましたりしていた。男性

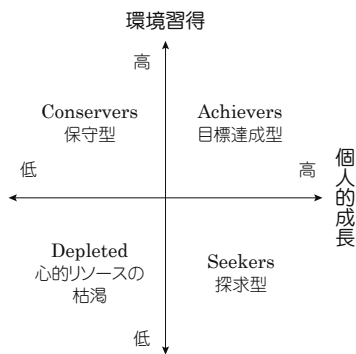
は何度も挑戦したものの、不運も重なり記録達成はならなかった。番組の終わりにレポーターが夫婦に、今度生まれ変わったらまたいまの相手といっしょになりたいかと質問した。男性はもちろんですと答えたのに対し、妻は「次は別の人といっしょがいいなあ」と言い、周囲は大きな笑いに包まれた。その言葉は文字どおりではないだろうし、かといって反対の意味だけでもないように思えた。両方の意味が何割かず入り混じった、人生のリアリティを反映した上質のユーモアなのである。そのような言動に思わずほほえむことができるのは感情が分節化できるゆえであり、大人としての成熟だろう。それは自分自身の人生を豊かにすることに通じる。

自分の快を追求することと他者のさまざまな感情を知ることは、感情を制御するうえでの2つの軸であり、それぞれの軸のどこに位置するかによっていろいろなタイプ（個人差）がある。快を目指す方向ばかりが強すぎて他者の感情状態に細やかに共感することができない人は、成熟した大人として信頼されないかもしれない。その一方、他人のいろいろな感情状態に敏感に反応しすぎて感情が不安定な人も、周囲が安心して接することができないだろう。自分自身の満足感や幸福感をどのくらい追求するか、他者の感情にどのくらい敏感に反応するかによって、さまざまな成熟のしかたがある。

**社会や人間関係のなか  
での身の処し方**

人間の社会生活は家族から始まり、つねに集団のなかで成長する。大人がさまざまな人間関係のなかで精神的健康を保つ生き方のスタイルに関して、リフは「環境習得」と「個人的成長」という2つの次元をあげて説明している（Ryff, 1989; Schmutte & Ryff, 1997）。「環境習得」とは、既存のさまざまな社会的ルールや人間関係などの社会的環境における適応能力や積極性である。一方「個人的成長」は、新しい刺激を求めて自分をつねに成長し拡大するもの

図 9-1 精神的成熟の 4 類型



(出所) Helson & Srivastava, 2001 をもとに作成。

と感じ変化していこうとする傾向である (図9-1)。

1958年と60年にアメリカのある短大を卒業した女性たちを60歳まで5回にわたって追跡した研究 (Helson & Srivastava, 2001; Helson & Wink, 1987) では、それら2つの尺度得点の高低によって精神的成熟のしかたを4つのタイプに分けた (短大卒業時点では4タイプはほとんど分化していないが、中年期になるとかなりはっきり分かれた)。

環境習得が高く個人的成長が低いタイプ (保守型) は、社会規範を素直に受容したタイプである。既存の社会規範によってしっかり「しつけられて」おり、たとえば会社で昇進することや標準的な家庭を築くことを、ほかの選択肢とあまり葛藤せずに第一と考える。衝動を制御しルールに従うという点での自己コントロールに優れており、生活の満足度も高い。しかし一方、基本的な価値観や社会通念を疑ったり相対化したりすることがあまりない傾向がある。

それに対して、環境習得が低く個人的成長が高いタイプ (探求型) は、安定を犠牲にしても新しい刺激を求める。仕事についていえば、他のタイプに比べて創造性は突出して高いが、逆に仕事が安定して

いることへの満足度は低い。支配的な価値観から独立していることが心理的な負担とならず、むしろ精神的健康につながっている人たちである。

一方、環境習得も個人的成長もともに高いタイプ（目標達成型）は、世の中をうまく渡っていくことを肯定的に捉え、既存のルールのなかで明確な目標を定め、それに向けて前向きにがんばる人たちである。自分の目標達成のために既存の社会的枠組みを積極的に受け入れ利用するので、それを批判的に吟味することは探求型よりも少ない。

大人としての成熟というと、既存の社会的枠組みのなかで大過なくすごし多少の成功をおさめることをイメージすることが多いように思う。しかしそれだけが成熟というわけではない。既存の考え方に異議申し立てをする少数派に位置し続けることでこそ納得し満足するような、いわば「とがった」成熟のしかた（探求型）もある。上手な歳のとり方はけっしてひと通りではないのである。

## 2 英 知

---

### 英知とは何か

人は成熟とともに“賢く”もなっていく。その場合の賢さとは、ふだんの経験から獲得されるものであり、実践的知能（第6章参照）の一種といっていよい。ただ、実践的知能は特定の専門領域、典型的には職業経験と結びついた熟達化の性格を強くもっているが、もっと一般的な、人が生きていくことそのものに関わる問題についての賢さ、聡明さがある。それを英知または知恵（wisdom）と呼ぶ。英知は、「ふつうはどうするか」といった通り一遍の知識ではなく、さりとして奇をてら



った解決法でもない。人間や社会についての豊富な知識に裏打ちされた、柔軟で明確な見識をもちあわせていることが大きな条件である。

英知の測定：英知に関  
係した知識

英知を心理学的にどのように測定したらよ  
いだろうか。人が生きていくことに関わる、  
簡単に答えのでない問題を出し、英知の理  
論にもとづいて回答を評価し得点化する研究がなされている。英知  
研究をリードしてきたバルテスらは、次のような評価の観点を提案  
している (Baltes et al., 1991; Baltes & Staudinger, 2000)。人間のもつ  
考え方や行動パターン、人間どうして起こる葛藤やトラブルの対処  
法、社会のルールや習慣、人の発達・加齢のしかたの多様性につい  
て、豊富な知識をもっていることが基本である。しかしそれだけで  
は不十分である。単なる物知りは英知ある人ではない。豊富な知識  
に裏付けられた自分なりの考えをもつこと、そのうえで自分の考え  
に固執することなく、それが正しいと思う根拠を自覚し、相対化す  
る構えができていることが必要である。

バルテスらの実験 (Staudinger & Baltes, 1996) から具体的に見て  
みよう。英知を問う問題として、たとえば次のような問題が出され  
る。

ある人のもとへ親友から電話がかかってきました。にっちもさ  
っちもいなくなり、自殺するつもりだということです。どうすれ  
ばよいでしょうか？

「どうすればよいか？」というのは、電話をかけてきた相手にど  
う答えるのが適切かという意味ではない。当事者に直接答えるには  
さらに細かな事情を知る必要があるし、カウンセリングなどの専門

知識をもっている人が有利だろう。ここでは、上のような問題を考える際の背景知識としてどのようなことを想起し、どう重みづけをして自分の考えをまとめるかを問題にしている。上の問題に対してバルテスらがあげた解答例は次のようなものである。

この問題は、とにかく何らかの返事をしなくてはならないという実際の側面がある一方で、人間は自殺が許されるのかという哲学的側面をも考えなくてはなりません。第一に、この決断は長いプロセスを経たうえでの結果なのか、ある状況下での一時的な反応なのかを知る必要があります。後者の場合は、その状況がどのくらい長く持続するのかがはっきりしません。状況によっては、自殺を考えることが理解できるかもしれない。しかし誰も簡単に人生をあきらめるべきではない。もしもほんとうに死を選ぶのならば、それに値するような「戦い」をしなくてはなりません。また、死にたいという人に対して別の道を示す責任が私たちにはあります。現在の社会は、老人が自ら命を絶つことを徐々に受け入れるようになってきていますが、それは危険なことだと考えるべきでしょう。自殺そのものがいけないという理由に加えて、社会がうまく機能しなくなるからです (Staudinger & Baltes, 1996, p. 762 より訳出)。

この解答はどのような点で優れているのだろうか。実際の側面とともに哲学的にも考えなくてはならないというのは、自殺という深刻な問題を考える際に必要な幅広い視野を感じさせる。当人にとってだけでなく、人間存在そのものに関わる問題だという視点である。衝動的な決断でないかどうかを知る必要があります、もし熟慮の末であるなら自殺という決断を理解しうる場合もあるかもしれないと

## 事項索引

### ●アルファベット

FとG(事例) 4, 71-72

QOL →生活の質

SOC 162-163

—方略 130, 193

—理論 130, 187

### ●あ行

愛 10, 103

愛着(アタッチメント) 6, 66, 83, 153

—行動 66-67, 153

—の個人差 68

—のタイプ 71, 73

—の内的ワーキングモデル 67-68

—パターン 99

—理論 66

アイデンティティ 10, 102-104, 150

—拡散 105-106

—混乱 10, 103

—・ステイタス 105-107

—達成 105

遊び 74-77, 138

共同— 75-77, 138

ひとり— 75-76

ふり— 41-45, 47

並行— 47, 75-76

連合— 75-77

扱いにくい(やすい)子ども 85-86

アルコール依存症 157, 175-176

安全基地 68

安定型(Bタイプ) 70, 73

暗黙知 134

育児ストレス 160-161

イクメン 160

一次のことば 110

遺伝 4

—と環境 100

「いま, ここ」 109-110, 179

イメージ操作 119, 124

インフォーマル(非公式)な活動  
139

ウェルビーイング 163-164, 194

嘘 56

英知 10, 197

—課題 200-201

エストロゲン 147

エビジェネシス 25

横断的方法 14, 122

親準備性 159

### ●か行

外向性 99

回避型(Aタイプ) 70, 73

外部化(方略) 112

核家族化 159

獲得/喪失のダイナミズム 22

数の保存 48-49, 57, 110

仮説演繹的な推論 115

仮想的な認識 42

可塑性 72, 176

葛藤 9, 11, 104, 145, 149

空の巣 156

—症候群 22, 175-176

加齢の主體的制御 193

感覚運動期 28, 83

感覚と運動の協応 31

環境 4

—への適応力 133

環境習得 195-196

関係の表象 43

記憶 200  
危機 104  
気質 71, 85-87, 99  
基本的生活習慣 85, 88-89, 99  
9カ月革命 37, 51, 77  
吸吸反射 27, 32  
協応 32  
共感性 63, 90  
共同注意 37  
均衡化 9  
勤勉性 10, 139  
具体的操作期 52, 110, 116  
グループ 141-143  
    インフォーマル・—— 139  
    フォーマル・—— 138-139  
ケア 10, 158, 160, 180-181  
    家族内—— 158  
経験から学ぶ 133, 135, 204  
形式的操作期 116  
傾倒 →積極的関与  
結婚 18, 21, 150, 154, 168  
限界テスト 125  
言語的知識 119  
原始反射 27-28, 31, 61, 63  
原始歩行 27-28  
語彙爆発 44  
公益性 204  
向社会的行動 140, 141  
後成 →漸成  
更年期障害 175  
高齢化 183  
    ——社会 12, 167  
互惠性 158  
心の理論 51, 55-56  
個人的成長 195-196  
個性 87  
コホート 16, 119-120  
    ——効果 16, 18, 124  
    就職—— 16  
    生年—— 16, 120  
孤立 10, 103, 149, 179

コンピテンス 83-84

## ●さ行

最適化 129, 187  
サクセスフル・エイジング（「上手に歳をとる」） 129, 136, 193  
作動記憶（ワーキングメモリ） 200, 204  
三項関係 36-37  
3歳児神話 159  
シアトル縦断研究 14  
ジェネラティヴィティ（生殖性） 10, 187, 190  
シュマ 8-9, 32, 136  
ジェンダー 95, 97  
    ——スキーマ 97  
    ——スキーマ理論 96-97  
    ——フリー 95  
視覚的断崖 37-38  
時間的展望 184  
シグナル行動 67  
資源 130-131, 158, 187, 193  
    認知的—— 128, 131,  
自己 79  
    ——概念 180  
    ——肯定感 178  
    ——主張 90, 146  
    ——制御 91-92, 182  
    ——像（イメージ） 21, 94, 180  
    ——中心性 46, 56, 76  
    ——投入 104  
    ——認知 81-82  
    ——の統合 184  
    ——評価 94, 174, 180  
    ——抑制 77, 91-93  
    ——理解 93  
社会的—— 174  
身体的—— 174  
生活的—— 174  
多重化した—— 171, 185  
内的—— 174

- 自己投入 →積極的関与
- 自尊感情 89-90, 94, 174, 188
- 実践的知識 200
- 視点取得 90, 110
- シナプスの過形成 (刈り込み) 30
- 社会化 138-139
- 社会的学習理論 96-97
- 社会的サポート 161
- 社会的参照 37-38, 65
- 集団規範 138-139
- 縦断的方法 14, 122
- 羞恥心 94
- 主観的老い 175
- 熟達化 109, 126, 128
- 出生順位 99
- 馴化 (法) 33
- 脱—— 33
- 循環反応 32, 84
- 循環プロセスモデル 155
- 準拠集団 139
- 生涯学習 178
- 生涯未婚率 168, 170
- 少子化 183
- 少子高齢化 165
- 「上手に歳をとる」 →サクセスフル・エイジング
- 象徴的な機能 42, 44-45
- 情緒的応答性 70-71
- 情緒的サポート 162
- 情緒的な絆 64-65
- 神経質 99
- 人生回顧 188
- 新生児模倣 28, 62
- 人生の最盛期 173
- 身辺の自立 88
- 親密性 10, 103, 149, 156, 179
- 心理社会的危機 9, 11, 103, 149, 179-180
- 心理社会的発達 9
- 心理的離乳 102, 145
- ストレンジ・シチュエーション法 68
- 69, 73
- スビルオーバー 171-172
- 斉一性 103
- 性格 →パーソナリティ
- 生活の質 (QOL) 188
- 制御 129, 170
- 成熟 193, 195
- 精神的—— 196
- 生殖性 →ジェネラティヴィティ
- 生得的制約 32
- 性役割 95
- 行動 96
- 世代間伝達 180
- 世代性発達 187
- 積極的関与 (傾倒, 自己投入) 104
- 接近行動 67
- 絶望・嫌悪 10
- セルフモニタリング 100
- 選好注視法 34
- 漸成 25
- 図式 9-10
- 的発達理論 179, 184
- 前操作期 41
- 選択 100, 129, 170, 187
- 全能性の幹細胞 24
- 早期完了 105-106
- 相互性 103
- 喪失 20, 30, 162, 185
- た行
- 胎芽期 25
- 体系的思考 116
- 胎児期 25, 31
- 対人関係 (人間関係) 38
- タテの—— 87-88, 93, 98, 102, 146
- ナナメの—— 87-88
- ヨコの—— 87-88, 93, 98, 102, 146
- 第2次性徴 100, 147-148
- 第2の人生 178
- 他者の視点 58, 203, 205
- 多重役割 171

脱衛星化 145  
探索行動 68, 70-71  
知 恵 136, 193, 197, 202  
知的好奇心 83  
知 能 118-120, 124, 132, 200  
—検査 118, 123, 132-135  
学業的— 133-135  
結晶性／流動性— 119  
言語性／非言語性（動作性）—  
119-120  
実践的— 109, 133-136, 197  
推論的— 119-120  
中心化 46, 52, 109  
脱— 52-53, 76, 110  
忠 誠 10, 103  
中年期 173, 180  
—危機 175-177  
超高齢者 189  
超高齢社会 189  
調 節 8, 32, 36, 40, 136  
諦 観 185  
抵抗・アンビヴァレント型（Cタイプ）  
70, 73  
停 滞 10, 180  
適 格 10, 139  
テストステロン 147  
トイレットトレーニング 12, 89  
同 化 8, 32, 36, 40, 136  
道具的サポート 162, 164  
統制不全型（行動） 71-72  
同 調 139, 143-144  
—圧力 140, 142-143  
—行動 75  
徳 10  
トラウマ 21

## ●な 行

内 省 201, 204  
内発的動機 83  
仲間集団 77, 141  
喃 語 66

二次のことば 110-111  
ニューヨーク縦断研究 85  
人間関係 →対人関係  
妊 娠 23  
認知的資源 128, 131-132  
認知発達 83  
ネガティブ・スピルオーバー 171

## ●は 行

把握反射 27  
場所法 125  
パーソナリティ（性格） 98, 179, 186,  
190  
8カ月不安 64  
発信行動 83  
発達段階 3  
発達の可塑性 4, 123, 125  
「発達は環境に埋め込まれている」 4  
パートナーシップ 144, 149-150, 158  
反抗期  
第1— 90-91  
第2— 101  
反社会的行動 141  
ハンドリガード 80  
被愛願望 143  
微 笑 61, 63-64, 66, 71  
自発的— 63  
社会的— 64  
生理的— 63  
誘発的— 64  
否定的同一性 107  
人見知り 38, 64, 74  
非標準的経験 171, 185, 190  
非標準的要因 17-19, 179, 190  
百寿者 189  
標準的要因 17  
標準年齢的要因 17-19  
標準歴史的要因 17-19  
表 象 36, 45-46, 56, 82, 100, 170,  
—の操作 46  
不安定型 70

夫婦の循環モデル 161  
フォークロージャー 106  
フォーマル（公式）な活動 138, 141, 144  
ブランニング 114  
フリーター 107  
ベビー X 実験 95  
防衛 143  
傍観行動 76  
方略 112, 114, 122-123, 129  
ポジティブ・スピルオーバー 171  
補償 128-129, 187  
母性剥奪 66  
保存課題 49  
ほふく反射 27

●ま行

見かけと本当の区別 46-49  
見立て 41, 45, 47, 138  
3つ山課題 50  
メタ認知 113-115  
目標と手段の分離 35  
モデリング 96  
モニタリング 114-115  
模倣 39  
モラトリアム 105-106

モロー反射 27

●や行

役割実験 106  
優越感 94  
有能感 89, 147  
養育態度 86, 99-100, 146

●ら行

ライフイベント 168, 181, 184  
ライフコース 18, 152, 168, 172  
ライフプラン 150, 153  
ライフレビュー 188  
離婚 154-156, 175  
  熟年—— 156  
利他的行動 187  
リハーサル 112-113  
領域固有性 134  
劣等感 10, 94, 99, 139  
連続性 103  
老年的超越 189-190  
論理的思考 52, 110, 115

●わ行

ワーキングメモリ →作動記憶

## 人名索引

### ●あ行

- 安藤寿康 99  
飯牟礼悦子 185  
ウィリス (Willis, S. L.) 124  
ウェスト・エバーハルト (West-  
Eberhard, M. J.) 4  
ウッドラフ (Woodruff, G.) 51  
エインズワース (Ainsworth, M. D. S.)  
68  
エリクソン (Erikson, E. H.) 8-11,  
25, 102-103, 139, 149, 158, 179-180,  
184  
エルダー (Elder, G. H.) 18  
岡本祐子 176

### ●か行

- 柏木恵子 181  
カールステンセン (Carstensen, L. L.)  
162  
クリーグル (Kliegl, R.) 125  
ケリー (Kelly, J.) 160  
孔子 174  
コール (Cole, M.) 117, 133  
権藤恭之 187

### ●さ行

- 相良順子 97  
シーグラウ (Siegler, R. S.) 57  
下仲順子 186  
シャイエ (Schaie, K. W.) 14  
鈴木忠 11, 16, 136  
スタウディンガー (Staudinger, U. M.)  
198, 200, 202  
スタンバーグ (Sternberg, R. J.)  
134, 204

- スベルキー (Spelke, E. S.) 33  
ソールトハウス (Salthouse, T. A.)  
127

### ●た行

- 高橋恵子 178  
田淵恵 187  
ダン (Dunn, J.) 53  
チェス (Chess, S.) 85-86  
チャーネス (Charness, N.) 128  
デローチ (Deloache, J. S.) 42-43  
トマス (Thomas, A.) 85-86  
トマセロ (Tomasello, M.) 37  
トーンスタム (Tornstam, L.) 189-  
190

### ●な行

- 中川威 189  
中里克治 186  
ネッセルロード (Nesselrode, C. S.)  
124  
野村信威 188

### ●は行

- バターワース (Butterworth, G.) 37  
ハッテンロッカー (Huttenlocker, P.  
R.) 29  
パーテン (Parten, M. B.) 75  
バーリック (Bahrick, H. P.) 121-  
122  
ハルシュ (Hultsch, D. F.) 122  
バルテス (Baltes, P. B.) 17, 129,  
179, 185, 190, 198-202  
ハーロー (Harlow, H. F.) 71  
ピアジェ (Piaget, J.) 8-9, 11, 28, 32,  
41, 49, 52, 83, 110, 116, 136



ビネー (Binet, A.) 118, 135  
平山順子 158  
ファンツ (Fantz, R.) 34-35  
藤永保 4  
フラーベル (Flavell, J. H.) 112  
ブレマック (Premack, D.) 51  
フロイント (Freund, A. M.) 130  
ベム (Bem, S. L.) 96  
ベルスキー (Belsky, J.) 160  
ボウルビィ (Bowlby, J.) 66, 72, 153  
ホリングワース (Hollingworth, L. S.)  
102  
ホワイト (White, R. W.) 83

●ま行

マーシャ (Marcia, J. E.) 104

松井智子 56  
丸島令子 180  
無藤隆 173

●ら行

ラブヴィィ・ヴィーフ (Labouvie-Vief,  
G.) 194  
リフ (Ryff, C. D.) 195

●わ行

若松素子 181  
若本純子 173

● 著者紹介

鈴木 忠 (すずき ただし)

白百合女子大学人間総合学部教授

飯牟礼悦子 (いむれ えつこ)

大東文化大学文学部講師

滝口のぞみ (たきぐち のぞみ)

帝京平成大学大学院臨床心理学研究科准教授

しょうがいほったつしんり がく

生涯発達心理学

—— 認知・対人関係・自己から読み解く

*Lifespan Developmental Psychology: Perspectives  
of Cognition, Social Relations, and Self*

ARMA



有斐閣アルマ

2016年12月15日 初版第1刷発行

著者 鈴木 忠  
飯牟礼悦子  
滝口のぞみ  
発行者 江草 貞治  
発行所 株式会社 有斐閣

郵便番号 101-0051  
東京都千代田区神田神保町2-17  
電話 (03)3264-1315〔編集〕  
(03)3265-6811〔営業〕  
<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷・株式会社理想社／製本・複製本印刷株式会社

© 2016, T. Suzuki, E. Imure, N. Takiguchi.

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。

ISBN 978-4-641-22074-4

**JCOPY** 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(社)出版者著作権管理機構(電話03-3513-6969, FAX03-3513-6979, e-mail:info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。